



ハイエナ



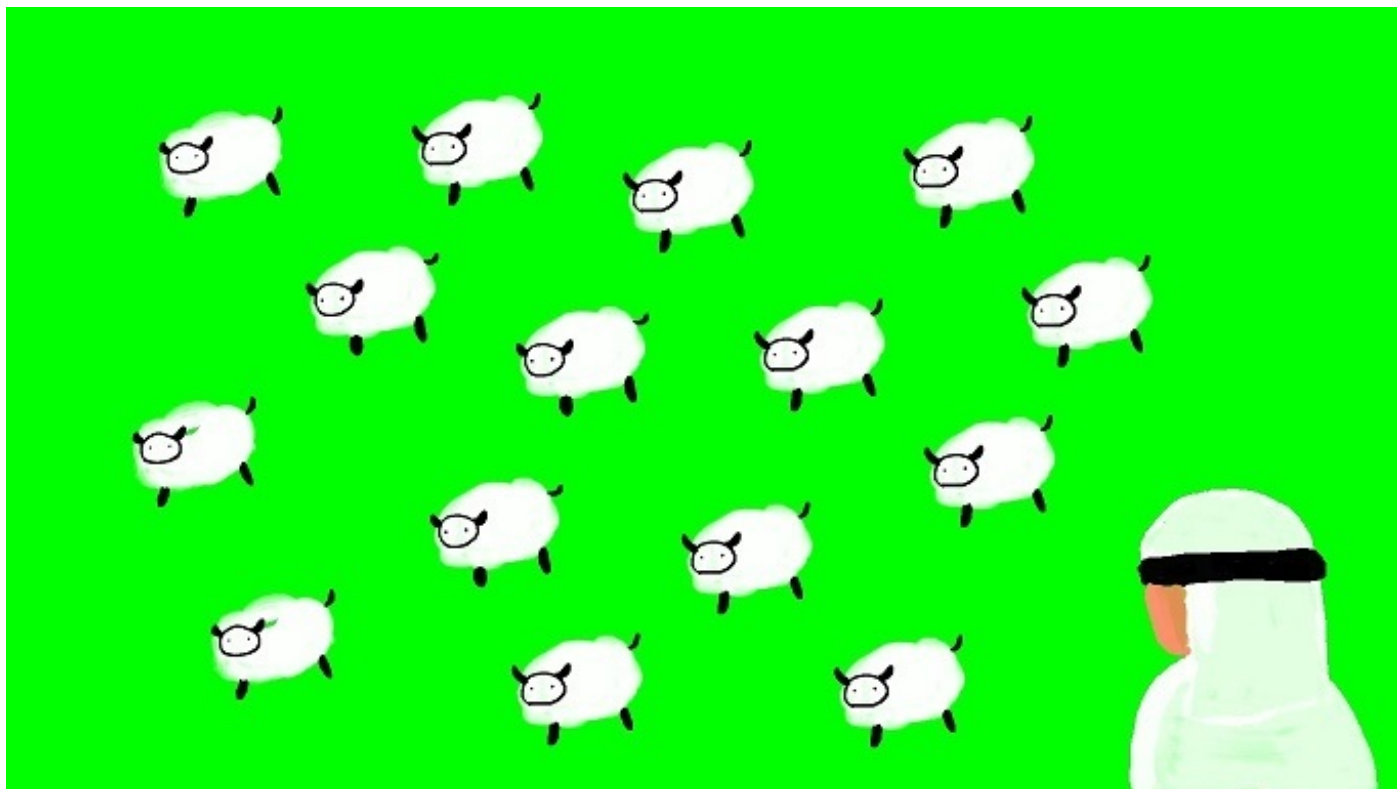
麵 平良

羊の群

ある金持ちの主が居て、彼は多くの羊を飼い、それを雇った羊飼いに管理させていた。

羊飼いは賢く、優しい性格であり、羊たちを愛情を持って飼育しており、主からも非常に信頼されていた。

彼は日々、盲目の羊の群を、牧草が豊かに茂る安全な場所へ導き、しっかりと番をして肉食獣等の外敵から守っていた。



奇妙な子供の誕生

ある羊のつがいが居た。他の羊たち同様、盲目で大人しく、羊飼いを信頼し敬愛していた。そんな彼らに第一子が誕生した。

その子は他の羊たちと姿形が全く違っていた。盲目の両親や他の羊たちには分からなかったが、羊飼いはすぐに悟った。

羊飼いはすぐに主へ報告した。彼らは全く驚いていなかった。こういう事は彼らにとって、非常によく起こり得る珍しくもない事だったからである。

相談した結果、前例通り羊として飼育する事となった。

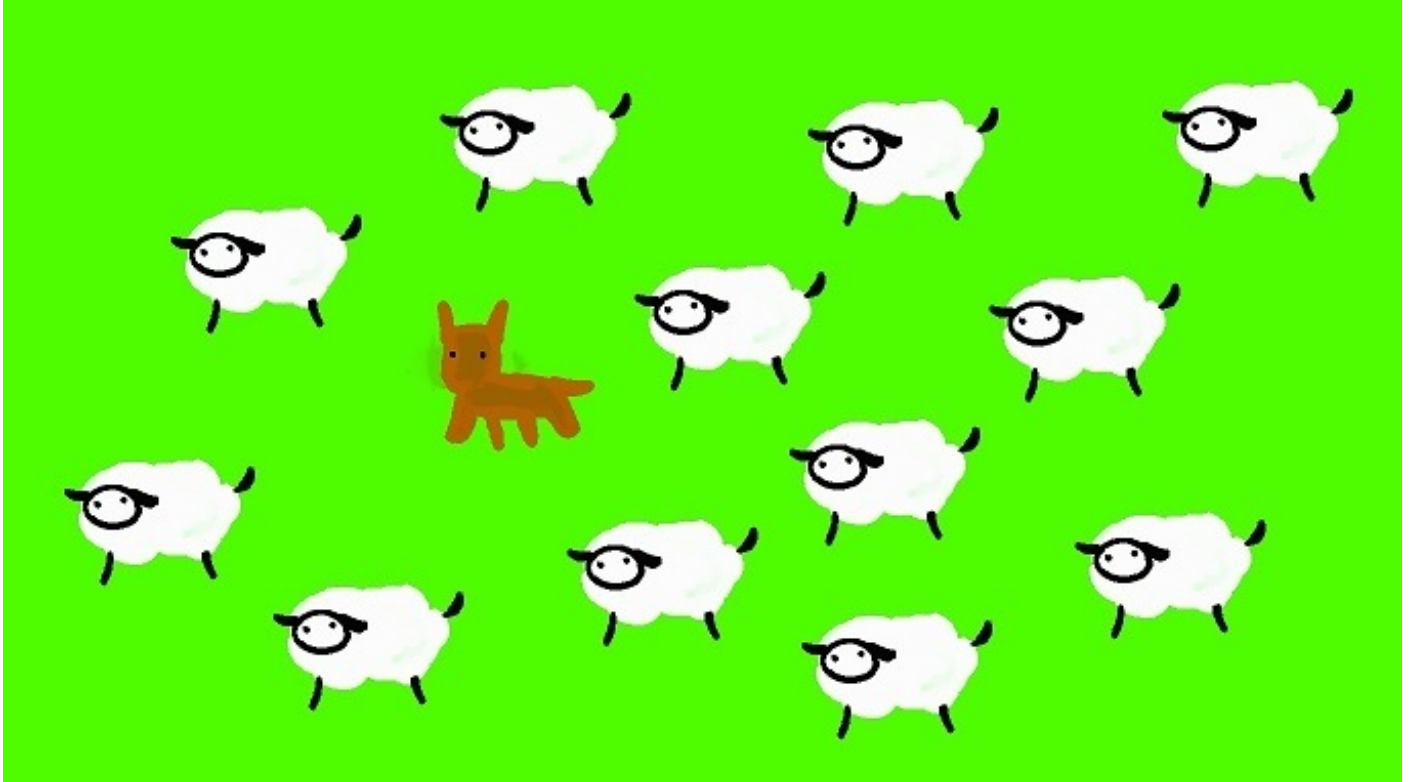


ハイエナ

羊飼いは、産まれたその子を「ハイエナ」と名付けた。

羊たちにはその名前の意味が分からなかったのに、深く考えずにその名を受け入れた。

ハイエナは他の子羊たちのように、ふわふわとした毛が生える事が無く、盲目でなかった。盲目の両親はその違いを「この子はたまに居る、少し変わった子羊なのだ。」と軽く考えており、たいして気にかけていなかった。



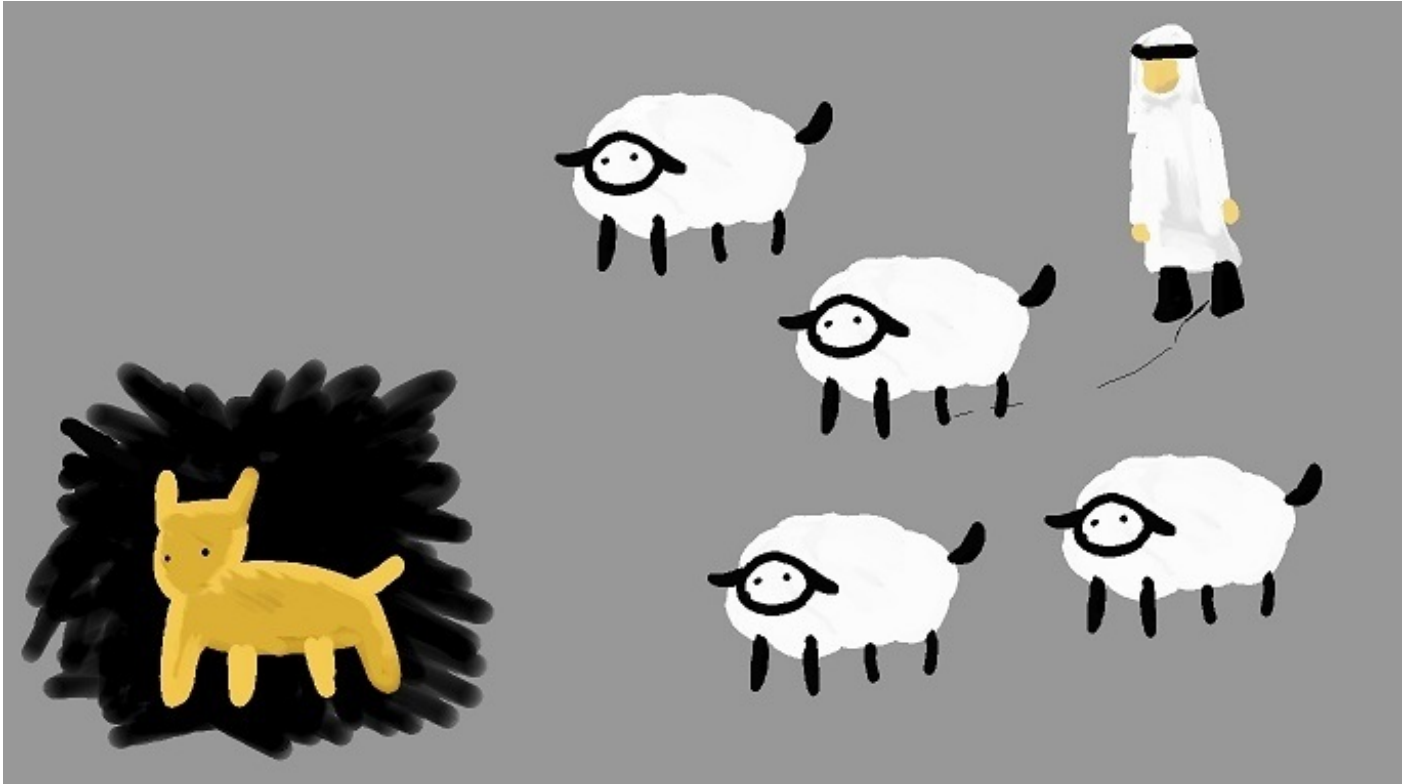
牧草が美味しくない

ハイエナは他の羊たちと違っていた。それを本人が最も強く感じていた。

羊たちが美味しそうに食べる牧草を、彼は全く美味しそうとも美味しいとも感じず、むしろ不味くて不快に感じていた。

体質にも合っていないようで、ハイエナは日に日に体を弱らせていった。

牧草を不快に感じるハイエナと仲間達は分かり合う事ができず、また不快な牧草しか与えない羊飼いの不満を持つようにもなった。



孤独

優しい羊たちは、それでもハイエナと友好的な関係を持つようとしたが、決して理解する事のできぬ相手との関係にハイエナは疲れ、一匹で居る事を好むようになった。

理解者になれぬ孤独と、日々弱る体により、ハイエナの気持ちは徐々にささくれ、両親に対してさえも噛み付いたりはしないまでも、暴言を吐くようになった。

彼の両親はどうすれば良いのか分からず、心配するばかりであった。



自分を知った時

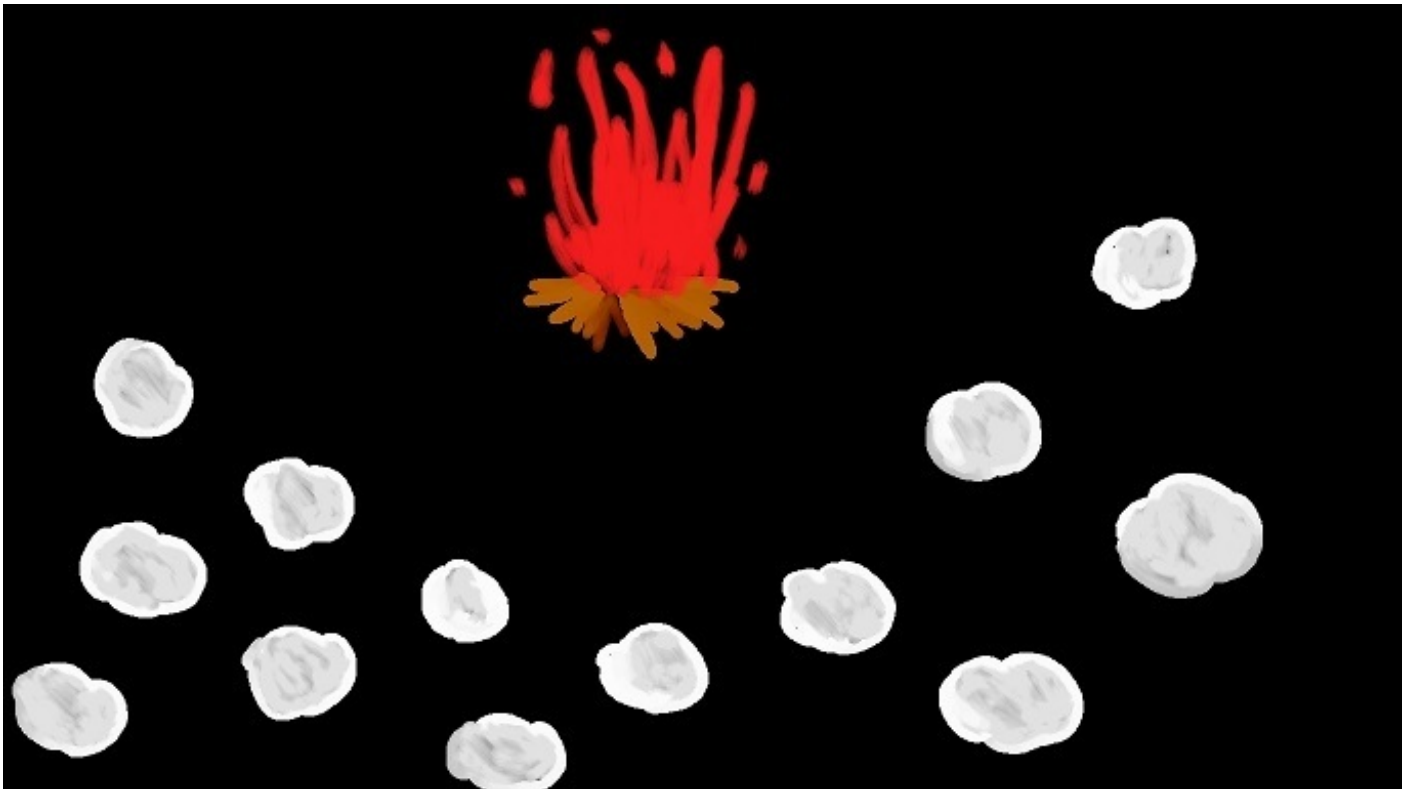
ある日、仲間の一匹が死に、火葬される事となった。火葬は多くの羊に見守られて行われ、ハイエナもその中に両親と共に加わっていた。

仲間の死骸が火葬にかけられ、やがて肉の焼ける匂いがし始めた。ハイエナはその匂いを嗅ぎ、産まれて初めて「美味そうだ」と感じた。

火葬が終わり、皆が立ち去った後、ハイエナはこっそり焼けた死骸のもとに寄り、その肉を恐る恐る口にしてみた。

それは非常に美味しく感じられ、また口にしようとして、産まれて初めて体内に正常に栄養として取り入れられたようにも感じられた。その喜びは仲間の肉を口にしたという罪悪感をもかき消す程であった。

それからハイエナは、仲間が死ぬ度にこっそりと、その死骸を貪るようになった。体は見る見る健康になり、ささくれていた気持ちも随分と和らいだ。孤独であるのは相変わらずであったが。



決別

ハイエナの母親は、盲目ながらも子の行動の異常に気付き、事を察した。

すぐに親子三人での話し合いとなり、母親はすぐやめるようにと泣きながら訴え、父親もこのままでは子が羊飼いやその主により処分を受けるのではと思い悩み、母親同様やめるように言った。

しかしハイエナは「処分されても構わない。僕に必要な物は死肉なのに、羊飼いや主も、くそ不味い牧草だけを食べろと強要する。

必要な物は与えられていないというのに、十分に与えていると一人合点だ。必要な物は全て与えられている、そういう権利があるのは与えられた側だというのに。」と言って反発した。

両親は驚いて、「私達にはどれだけ噛み付いても構わないが、羊飼いや主、他の羊たちには絶対に噛み付いてはいけない。」と諭そうとした。

「僕に死肉を食うな、と言うのは死ねと言うのと同じ事だよ。奴らに従い、身も神経もすり減らして死ぬ事が正しいと言うのか？それが連中の、そしてあんたらの正義か？」

ハイエナは泣きながらそう訴えた。

彼だって牧草を美味しいと言えるようでありたかったし、仲間や両親と笑って仲良く暮らせるようでありたかったのだ。

もう二度と死肉を食べないと、表面上の約束をする形でこの話は終わった。彼らは疲れてしまい、これ以上の議論は無理だった。

しかしハイエナは再び同じ事をし続けるであろう事を、本人も両親も知っていたし、実際そのようになった。

両親は針のむしろに座るような気持ちで、どうしていいの分からず嘆き、全てを知っているであろう羊飼いや主が許してくれる事を願った。



別れ

ある夜、全ての羊が寝静まった頃、ハイエナは一匹こっそりと柵の外へ出た。
彼は去り際、いつものように番をしていた羊飼いの方を振り向き、非常に穏やかに言った。

「長い間世話になったね、色々酷い言動とってごめんな。しかし、これでも感謝しているんだよ。あんた、何だかんだで良い奴だよ。オレの事も最後まで面倒見てくれたし。」

「いや、すまなかったな。それでも...出て行くという事は、私が至らなかったのだろう。」

「仕方が無いよ。あんたも主も、飼いたかったのは羊であって、オレではないのだから。」

「羊として生きて行くのなら、ここに居ても構わない。」

「そりゃ無理だったよ。オレなりに努力もしたが...あんたもよく知っているだろう？」

「.....両親の事が心配か？」

「あんたがしっかり面倒見てくれるだろう？彼らは羊だから。」

「そうだ。私の羊は私が責任を持って、しっかり見る。」

それを聞くと、ハイエナは安心した表情になり、しかし悲しそうに背を向けてとぼとぼ歩き始めた。泣いているようにも見える、その後ろ姿は、やがて夜の闇に消えていった。



ありのままで生きる事への代償

たまたま目を覚まし、事の次第を見ていた一匹の羊が「あの子はどうなるのでしょうか」と心配そうに羊飼いに聞いた。

羊飼いは「それがお前に何の関わりがありますか。お前は私に従いなさい。」と静かに答えた。

羊飼いがハイエナを探す事は無かった。彼は羊ではなかったからである。

